AMDA ジャーナル ー国際協力ー 2012年秋号 2012年10月25日発行 □発行定日 年4回（1・4・7・10月 各25日） □1995年11月27日 第三種郵便物認可

AMDA 多様性の共存 ジャーナル

2012年10月25日 VOL.35 第263号 定価550円
発行／AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町3-31-1
TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp
郵便振替：01250-2-40709 口座名：特定非営利活動法人アムダ

2012年 秋号 秋

救える命があればどこへでも

特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
http://amda.or.jp/
特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
http://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
http://amda-imic.com/

期待される被災地での鍼灸治療

AMDAでは震災後間もない昨年3月から避難所内や巡回診療先で、鍼灸治療を岩手県大槌町で実施してきました。この経験を活かし、宮城県雄勝町でも鍼灸治療を取り入れ、9月から保険診療対象となりました。痛みをやわらげるだけでなく、心身のバランスを整える作用をもつ鍼灸は、いずれの被災地の人々にも期待を持って診療日を待ち望まれる存在になっています。AMDA大槌健康サポートセンター内で施術する佐々木賀奈子鍼灸師は、自身が津波にのまれ、町内にあった治療院兼自宅が流され仮設住宅で暮らす被災当事者の視点から、施術環境にも細やかな配慮を欠かしません。雄勝町での巡回鍼灸では石巻から吉田保鍼灸師が通い施術が行われています。AMDAの鍼灸プログラムは、地元の鍼灸師の篤い思いで継続しています。

雄勝町での鍼灸治療

AMDA 宮城県石巻市雄勝町 鍼灸による健康サポートプログラム

AMDAは地元鍼灸師を雇用し、雄勝町で4月から7月までの3ヶ月間、無料の鍼灸による健康サポートプログラムを実施しました。3か月間で16回実施した本プログラムの受益者数は128人で、60歳以上80歳未満が48%、80歳以上が35%と高齢者が約8割を占めました。主な症状の腰痛、頸部・肩・上肢痛、下肢痛、膝痛は、全体の96%を占め、このうち半数以上が震災後に発生したものでした。また、アンケートを実施した患者の100%が、保険診療になっても継続して鍼灸治療を受けたいと希望していました。この状況から、AMDAでは、鍼灸治療が地域で継続されるように、健康保険を導入することとし、巡回診療場所の調整等側面的援助を継続することにしました。現在、地元の医療機関と連携し、雄勝町の3地域（名振地区、水浜地区、大須地区）を隔週水曜日に訪問し、鍼灸による健康サポートプログラムを保険診療扱いで実施しています。9月の受益者数は22人でした。10月以降も同様に継続していきます。

AMDA 大槌・健康サポートセンターでの活動

AMDA 大槌・健康サポートセンター前の菜園で

AMDA大槌・健康サポートセンターでは、これまでの手芸教室や体操教室に加えて、今秋より天然酵母パン教室や[redacted]教室なども開催しています。また建物の前には無農薬の家庭菜園スペースを設けており、鍼灸治療の待合時間や、ふらりと立ち寄られた方々が、思い思いに「土いじり」をすることで、自然とリラックスにつながり、笑顔の見える場所となっています。

施設内の鍼灸院では、5月に184人、6月に172人、7月に144人、8月52人、9月103人の鍼灸治療が行われました。今では予約が3週間待ちとなっており、被災地での鍼灸のニーズの高さが伺える状況となっています。地域の方の集う場所としての機能拡張と鍼灸治療のニーズに応えるため、増設計画を進めています。

災害医療における鍼灸治療の果たす役割とその可能性

今年度の岡山県立大学大学院「災害医療援助特論」公開講座（9.15 AMDA協力）では、「東日本大震災被災地において鍼灸治療の果たす役割とその可能性」をメインテーマに、自身が被災者であるAMDA大槌健康サポートセンターの佐々木賀奈子鍼灸師と、明治国際医療大学教授で鍼灸師の今井賢治先生にご講演いただきました。

鍼灸師が被災地で緊急医療チームと共に活動するというのはこれまでの歴史の中で初めてのことだと思われます。今回、災害医療における鍼灸の重要性が見出されたといえましょう。AMDAの鍼灸師として緊急救援期から復興支援期に渡り3回被災地を訪れた今井教授は、科学的な鍼灸治療の効果について具体的に紹介されました。先駆的で意義深い講演となりました。

左から高橋医師、吉田鍼灸師、佐々木鍼灸師、今井教授、伊藤教授。雄勝町で

夏季医療ボランティア派遣（宮城県・公立志津川病院）と被災地医療支援

宮城県南三陸町の公立志津川病院および南三陸診療所における春季の医療ボラン

<次ページにつづく>

AMDA 東日本大震災復興支援活動

公立志津川病院南三陸診療所スタッフと山路看護師

ティア派遣に続き、夏季も医療ボランティアの派遣を実施しました。7月9日から9月28日までの派遣者は、医師2人、看護師3人、准看護師2人の計7人でした。冬季派遣も予定しています。

【AMDA 夏季医療派遣者】

- ●山路　未来：看護師／岡山県在住
- ●向井　信子：准看護師／大阪府在住
- ●蛯原　　茜：看護師／茨城県在住
- ●高岡　邦子：医師／東京都在住
- ●宮脇佐名世：看護師／千葉県在住
- ●木本　敬洋：准看護師／福岡県在住
- ●木本　　豪：医師／千葉県在住

第3回 AMDA 被災地間交流事業
阪神淡路 ― 岩手県大槌町 ― 宮城県気仙沼

気仙沼からの「流れ寿司」様と大槌の高校生・スタッフ等

「淡路ビーフ新谷」様により準備されるもも肉の丸焼き

7月15日、岩手県大槌町の大槌北小学校に設置された福幸きらり商店街で開催された「福幸きらり夏祭り」にて、第3回目の被災地間交流事業を実施しました。

淡路ビーフ新谷（新谷福松社長）様の協力を得て、淡路ビーフもも肉の丸焼きが行われ、合計200ｋｇ分の淡路玉ねぎのお土産付きで、お祭り会場来場の方々に配布されました。70ｋｇのお肉が丸焼きになっているのは壮観で、多くの方が見に来られ、写真を撮ったりもされていました。300人前以上もあったお肉は開催から2時間ほどですべて無くなり、たくさんの方から、「おいしかった」「元気をもらいました」などの声が寄せられました。お肉を食べてくださった方々には募金をお願いし、そのお金はすべて福幸きらり商店街への寄付とさせていただきました。　　（AMDA 兵庫県支部）

町に寿司屋が1軒もなくなった大槌町の人々にお寿司を食べさせたいと、気仙沼の流れ寿司様が参加してくださり、同じ被災地からの心のこもったお寿司は心に響くものでした。

東日本被災者夏休み招聘プログラムを華蔵寺（高野山真言宗、岡山県久米郡美咲町）・AMDA 合同企画で実施しました。大槌町から高校生3人を7月25日から29日まで5泊6日で招聘し、美咲町での寺子屋活動、岡山市内での AMDA 高校生会交流会と、絆を深める夏休みとなりました。感想文を紹介します。

AMDA 大槌・高校生会
三浦　智理

先日私は大槌 AMDA 高校生会として招待され、5泊6日で沢山の経験をしました。

2、3日目は華蔵寺に行きました。高校生会の発表がありました。途中震災のことを思い出し言葉に詰まりまることもありましたが、自分なりに発表できたと思います。夜はお寺に泊まり小さい子供達と寝ました。夜はお坊さん達のお手伝いをしながら方言の話や、地元の話などで盛り上がりました。5日目には岡山の高校生会と交流がありました。最初は活動発表や避難所でのボランティアの話をしました。その後震災の話になりテレビではきけないような大槌のことを大槌稲荷神社の十王館さんに話していただきました。リアルな話で当日のことを思い出し胸がいっぱいになりました。けど、もっともっといろんな人に本当のことを知ってもらいたいです。私達が経験したことを知ってもらって、自分自身が震災にあった時に少しでも糧になればと思います。辛いけど少しずついろんな人に話できたらと思います。

そしてその日は高校生会の安藤美友さんの家にホームステイさせていただきました。美友さんも美友さんのお母さんもすごく親切でした。嬉しかったです。この岡山県での5泊6日はそれぞれ1日1日が貴重な体験ばかりですごく充実した旅でした。華蔵寺の国明さんが言っていたように感謝の気持ち『ありがとう』をこの旅に関わってくれた人に伝えたいです。

阿形ご住職と大槌町の高校生　華蔵寺で

AMDA 大槌・高校生会
澤舘みさと

2日目に行った華蔵寺では、震災のことやボランティアしていたときのことを発表しました。あまり上手く伝えることが出来ませんでしたが、皆さんが真剣に聞いてくれてとても嬉しかったです。

5日目の岡山の AMDA 高校生会との交流会ではお互いの活動を発表しました。岡山の高校生会の人達が私達のために募金をしているのを知って、とても嬉しかったです。

AMDA 高校生会で交流会後ボウリング

今までの大槌の AMDA 高校生会の活動は地域のための活動が主でした。ですが、これからは私達を支援してくれた人達に恩返しができるような活動をしていければと思います。また、Skype やメールを使って、岡山と大槌の高校生会が一緒にできる活動をやっていきたいと思います。

8月23日 AMDA 大槌健康サポートセンターでは岡山から黒住教青年部の方々が雅楽の演奏を披露してくださいました。その場にいた地元の方々は、音合わせの段階から、雅楽の音色に癒され涙していました。

AMDA 東日本大震災復興支援活動

東日本大震災直後から多くの神社仏閣が民間避難所となりました。その一つ、岩手県大槌町の海辺高台にある大槌稲荷神社では、60年に一度は大災害があるという代々の言い伝えに基づき、災害時を乗り切る様々な知恵が伝承されていました。

多いときには150人程の避難者を受け入れ、模範的な避難所と称された大槌稲荷神社から禰宜(ねぎ)の十王舘勲氏と昌子夫人らを、災害時の宗教施設の役割についてその経験を語っていただくため岡山にお招きしました。夫人からのお手紙を紹介します。

避難所となっていた当時の大槌稲荷神社での鍼治療

十王舘　昌子

RNNボランティア講座での講演を終えて
十王舘勲氏と昌子婦人（右から3人目と4人目）

大槌から1,200kmの地岡山県へ、一生行く事がないだろうと思っていた地で、5泊6日という長旅、AMDAの皆様方には大変御世話頂き誠にありがとうございました。（略）

記者会見の場では、前の日、夫の講演を聞き、震災当時を思い出し涙してしまい大変申し訳ございませんでした。当時は息子二人、両親の安否がわからず、頭の中が混乱している中での避難者の対応、津波にのまれ命からがら逃げびしょぬれになって来た人を着替えさせたりし、バタバタしていたら、外は真っ暗で、出て見ると、吹雪、実家のある町方は大火災でした。

次の朝早くから、炊き出しが始まり、避難所の方々に食べさせなくては…

神社の境内は安否確認の人達でごった返しになっていました。下を見おろすと、死体、ガレキだらけ…。名前を呼びながら、ガレキの上を歩いている人とかいました。何で私は捜しに行けないのかと怒り、車の中で大泣きしました。

3日目で二男、一週間後に三男が無事に帰って来た時は抱きしめ合い喜びました。母は3月25日に発見し、秋田の男鹿で火葬し、父は行方不明のまま…

でも、私にはやらなきゃいけない事がある。避難者を守らねば…。ふと我に返ると、夫は一人で頑張り、奮闘していた。背中が大きく見え、とても頼もしく見えた。

8月第一週で、神社避難所を閉鎖する事となり、無事100名余の方々を仮設住宅に送り出す事ができました。慌ただしくお盆の行事を終え、やっと元の生活に戻る事ができると思いきや、10月初め、夫が過労で倒れ、打ち所が悪く、頭から血を流し、救急車で病院へ…。一瞬どうなるのかと思いきや、点滴を終えると、当分、身体を休めれば問題ないとの事、まずは、一安心。その後、何度か講演の依頼を受け、秋田、静岡、横浜など無理をさせない為、付き添って歩きました。

2日目にお世話になった華蔵寺様始め、住職の方々、美咲町の方々には、大変立派な法要をして頂きありがとうございました。（略）

岡山の大学生が大槌町へ

8月22日から26日の4泊5日（車中2泊）の日程で岡山県内の大学生が岩手県大槌町でボランティア活動を行いました。このプログラムは昨年に続き2回目で、（社）岡山経済同友会の主催で、大学コンソーシアム岡山正会員大学の学生さんを被災地に送り、大槌町での活動調整や受け入れをAMDAが担当するものです。今年のボランティア作業のメインは、被災した当時体育館は遺体安置所に校庭は廃車瓦礫置き場となりその後放置されていた旧大槌中学校校舎を、その解体前に片づけるというものでした。清掃活動の後の昼食は、中学生との合同のバーベキュー大会でした。

旧大槌中学校の片づけ清掃作業

今回参加した大学生の感想として、「大槌の人は、自分が思っているよりも強く、自分ももっと積極的にできることを頑張ろうと思った。」「実際に訪れてみて、町の人と関わって、話を聞いてみて、今生きることのありがたさ、大切さを感じた。」「本当に必要な支援とは何かを考えるきっかけとなった」

などの声が聞かれました。実際に被災地現場でボランティア体験することで岡山の次世代育成につなげようという試みは、着実に実を結んでいるようです。

8月23日、大槌中学校長によるお話のあと
大槌中学生全員とのバーベキュー

大槌町立大槌中学校 校長　鈴木 利典

AMDAと岡山経済同友会のご支援で被災校舎の職員室の掃除がやっと終わりました。被災地の目まぐるしさを象徴するように、震災から一年半、ほとんど手付かずの状態でした。被災校舎とその周辺には、津波の犠牲者がたくさん流れ着き、本校では生徒も亡くなっています。遺体安置所となった体育館と被災校舎に、職員を連れて行くことには戸惑いもありました。そんな中、遠く岡山から夜行バスで駆付けていただき、休息も取らずに後片付けを始めてくれた大学生、NPO、岡山経済同友会の皆さんのご支援に、心から感謝しています。

さらに、翌日は、全校生徒に焼肉をご馳走していただきました。本校には、被災生徒181名、仮設住宅からの通学者127名という厳しい現実があります。焼き肉の煙越しにその生徒たちの笑顔が見えました。こちらも感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとございました。今後も温かいご支援をよろしくお願いいたします。

人材育成プログラム

AMDAでは、これまでの事業実施経験やネットワークを生かし、人材育成を事業の柱の一つとしています。国際塾をはじめ、様々な形で海外研修プログラムを実施することをとおして、日本の若者の気づきや研鑽を促し、次世代育成を行うことは、これまで多くの皆様からいただいたご支援に応えることにも繋がると考えています。

第2回AMDA国際塾　インドネシアへ

岡山大学教員とAMDAとで共同運営する「おかやま国際塾」（委員長をAMDA菅波代表が務める実行委員会形式）が、昨年に続き今夏第2回の研修を実施しました。事前の研修を経て、3人の学生が8月25日から9月1日までインドネシアで実地研修を終えました。報告の一部を紹介します。

インドネシア民族舞踊体験

岡山大学法学部3年　**笹部　緑**

私が今回の研修に応募したのは、以前より国際貢献に興味があり、実際に行動する際にどういった準備や方法がとられているのかということを知りたいと思ったからです。特にこのプログラムでは企画から自分たちで行うため、積極性が必要で、その分充実した経験ができると考えました。また、医療を学んでいない私ができること、すべきことは何かを考えたいと思いました。

準備の段階において、AMSA* Indonesiaと連絡を取り合う際に、情報が共有できなかったり、思うように返事がもらえなかったりと、戸惑ったこともしばしばありました。私たちは、欲しい情報を得てから次の行動に入ろうとしていましたが、「情報がないために現地の状況がわからず、準備が進められない」のではなく、「どんな状態でも対応できる準備をしていく」ことが大切だと学びました。

最後に、私がこの研修を通して一番感じたことは「感謝」です。感謝の気持ちを忘れず、またその気持ちを伝えることも忘れず、人と人との関係を大切にしていきます。AMDAの精神と今回学んだことは、今後の自分の行動や考えに活かしていきます。

*AMSA＝アジア医学生連合協議会

ハサヌディン大学病院見学

岡山大学薬学部3年　**藤田　麻緒**

このプログラムは、現地とのやり取りを含め、準備段階から自分達で創っていく企画ということで、今までにない経験をするよい機会でした。単に海外に行き、新しい世界を知る楽しみばかりではなく、慣れない英語を使って連絡を取る難しさ、伝えたいことを相手のことを考えながらまとめることの大切さ、そして、何よりも、相手に対して感謝の気持ちを伝えることの重要性について再認識しました。自分1人の力では何もできないことでも、国際塾生3人とAMDA本部の皆様、そしてAMSA Indonesiaの学生達の力を借りることで、私達にしかできないプログラム、私達だからこそできるプログラムができたのだと思います。（略）

ハンセン病施設の見学

私がこのプログラムを通して学んだことは、本当に多く、日本にいるだけでは感じることができない、また考えさえしないことばかりでした。自分の意見を適切に伝える難しさや、社会で求められる責任を再確認しました。そして、何よりも、この素晴らしい機会を与えてくださったAMDAの皆様、関係者の皆様、そしてインドネシアでの生活や様々なイベント、計画に協力してくださったDr.Tanra、Dr.Hamka、およびAMSA　Indonesiaの学生達に感謝の気持ちでいっぱいです。インドネシアの学生達には感謝の気持ちを伝えても伝えきれない、もどかしい思いがありますが、出会えたことの感謝を忘れず、彼らとの連絡を継続的に行い、よい友好関係を継続させながら、お互いを高めあっていけるような関係が続けばいいなと思います。

日本国際保健医療学会学生部会 (jaih-s) 海外フィールド研修　報告

スリランカを訪れて

愛知医科大学医学部医学科3年　**服部　惠**

私は2012年8月25日から31日までスリランカを訪れ、現地ではAMDAスリランカ支部長のDr. Samarageと彼のもとで働いている職員の方に同行していただき、現地の病院、学校など普通の旅行では見ることのできないようなところを見学させていただきました。

スリランカはまだまだ発展の途中で、長い内戦により大都市と地方との人と物の行き来が遮断されていたことにより、大都市に技術や物が集中してしまいました。また、地域の病院の医療スタッフの不足がありました。東海岸にあるトリンコマリという都市のGeneral Hospitalは大きくてきれいな病院でしたが、医療スタッフの不足が問題になっているそうです。

私は将来、海外でも働きたいと考えていますが、自分の考えの甘さを痛感し、これからの課題を見つけることができたという点で、この研修はとても意味のあるものでした。　（抜粋）

さまざまなインターン受け入れ

AMDAで活動することが研究に繋がる

昨年に続き、保健師の美甘きよさん（筑波大学人間総合科学研究科博士前期課程2年）が、研究の一環として、東日本大震災被災地からの青少年招聘プログラムを手伝ってくださいました。

大槌町からの高校生ら一行を見送る美甘さん（左）

医療和平プログラム

スリランカ医療和平事業パートⅡ ― 白内障手術

スリランカには白内障に苦しむ多くの高齢者がおりその殆どは、都市部から離れた郊外に住んでいます。本事業を実施したヌワラエリヤ市は人口80万人以上が暮らすスリランカ中部に位置する紅茶の栽培で有名な町です。この紅茶栽培のエリアに暮らす人々の多くが、経済的に困窮しており、特に高齢者にその割合が多くなっています。

長い内戦が終結したスリランカで、これまでに医療和平事業として、北部・ジャフナ地区、南部・バーナンドラ、東部・トリンコマリー市などで実施し、今回は第4回目として、2012年8月22日から24日の3日間、ヌワラエリヤ市内にあるヌワラエリヤ総合病院で、カラシバヤガナサ医師を中心に地元の眼科医のもと手術が実施されました。

本事業はAMDAスリランカの協力のもとAMDA本部の事業として、50人の手術を行いました。

全ての手術は熟練の医師によって行われました。また、重度の白内障の患者にはECCEと呼ばれる手法がとられ、スタッフ20人体制で行われました。その他にも、

今後のフェイコ（水晶体乳化吸引法）手術のため10個のレンズを寄贈しました。

今回手術を受けた患者の平均は約60歳で、一様に、術後、視界がくっきりと良好になり喜んでいました。中には、「今までの人生で一番良く見える！」と喜ぶ患者さんもいらっしゃいました。

本事業はヌワラエリヤ総合病院職員からも、地元の方々からも高く評価されました。

紛争の続くインドネシア・アンボン島での洪水被害緊急医療支援活動 ―医療和平を見据えて―

7月31日に発生した台風サオラ(Saola)による豪雨により、インドネシア・マルク州アンボン島で洪水と土砂災害が発生し、インドネシア国家防災庁（BNPB）によると8月1日の時点で、死者8名、負傷者5名、行方不明者3名、1785軒が浸水、131家族、599名が家を失う被害となりました。（8月6日付インドネシア軍の情報によると、被災者数は12,753人、死亡者数は13人）

これを受けて、AMDAインドネシア支部より医師3名（内1名はアンボン島出身）、看護師1名、AMDA本部より調整員1名を被災地に派遣し、多国籍医師団を結成して8月4日から8日まで被災地での緊急医療支援活動や物資配給を実施し、7日にはインドネシア軍と合同でも、イスラム教徒地域とキリスト教徒地域での活動を実施しました。今回の活動は、単に緊急医療活動の観点だけでなく、対立する両グループに医療を提供することで和平構築に資するAMDAの「医療和平プロジェクト」とすることを視野に入れたものです。AMDA本部より調整員としてマレーシア国籍のアロイシウス・シタミが参加しました。

これまで、医療和平事業をアフガニスタン、コソボ、スリランカ、インドネシア　アチェ州で実施しました。

ハイチ地震復興支援３年目 ― 第２回 スポーツ交流事業

2010年1月に発生したハイチ大地震に対する復興支援の一環として、同年8月第1回スポーツ親善交流を、隣国ドミニカ共和国にて、ハイチ・日本・ドミニカの3か国の青少年が参加し開催しました。そして第2回として、2012年9月13日と14日、AMDA本部とAMDAハイチ支部主催サッカー交流を、ハイチの首都ポルトープランスで実施しました。3つの学校―

Cristophago（赤と黄ユニフォーム）,AJA（白ユニフォーム）,Tigers（黒と青ユニフォーム）― から11歳から14歳のハイチの少年らが参加し、AMDA本部からも準備協力に調整員が赴きました。選手やコーチのユニフォーム、記念品などをAMDAが提供し、炎天下の中、白熱した戦いが繰り広げられました。

開会式では、1分間の黙とうが捧げられ、その後、ハイチ国歌斉唱、国旗掲揚が行われた。国歌斉唱には地元の歌手が参加し、休憩時間にも歌を披露してくれました。

今回2回目の参加となるハイチの少年には、自分たちのチームを'AMDAチーム'と誇らしげに呼んでいる光景も見られました。

会場では、多くのボランティアが参加し、運営をサポートしてくれました。予想を超える多くの観衆が集まり、ハイチでのサッカーへの熱狂ぶりが伺えるものでした。

これからも被災地復興支援のひとつの形としてスポーツ交流を効果的に取り入れていきます。

◆年賀状印刷でAMDA活動支援！

ご協力よろしくお願いします

今年も（株）中野コロタイプ様のご協力によるAMDA支援年賀状企画を同封しご案内しています。印刷費の一部がAMDAへの寄付となるものです。同封のチラシでお申し込みください！

2012年7月～9月の動き

<講演>

7月7日	岡山市民公開講座 /「わが国の最新鋭国際医療貢献・病院船団」–アジアにおける国際医療貢献–	日本生体医工学会航空・艦船医工学研究会
7月9日	岡山経済同友会　教育問題委員会	岡山経済同友会
7月20日	保健部会研修会・中教研岡山支部養護教諭研修会 / 東日本大震災の救援等について	岡山市中学校保健部会
7月27日	第55回中国・四国地区知的障害関係職員研究協議会 / 晴れの国岡山から世界に–AMDAの活動–	(社) 岡山県知的障害者福祉協会
8月1日	夏休み親子　de　AMDA　2012	おかやまコープ美作エリアへいわプロジェクト
8月2日	WCRP(世界宗教者平和会議)・JT「関西(岡山)学習会」	世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会
8月6日	岡山経済同友会–大学生大槌訪問　参加大学生事前勉強会	岡山経済同友会
8/23・9/8	特別講義「看護の統合と実践　国際看護」	岡山県立真庭高等学校
8月24日	将来、医師を目指す学生に対しての講演　これまでの医療活動内容　その大変さや興味深さ・使命感など	メディカ大阪
9月5日	難病地域ケア・システム会議　「災害時の患者支援について」	岡山県
9月6日	第35回中国・四国地区公民館研究集会 - 平成24年岡山大会–「人と人のつながり、きずなの大切さ」	岡山県公民館連合会
9月6日	バングラデシュ洪水緊急支援活動報告	おかやまコープ
9月8日	旭竜学区防災キャンプ2012　避難所生活体験会	旭竜学区防災キャンプ実行委員会
9月14日	全国歯科技工士教育協議会研修講演会　「お互いさまのチカラ」—医療従事者育成のための医療の根源—	社団法人岡山市歯科医師会立　岡山歯科技工士専門学院
9月27日	もっとつながろう東北と	おかやまコープ　岡山東エリア
9月27日	インドネシア　アンボン島洪水緊急支援報告会	新庄村新庄中学校
9月29日	第23回日本福祉文化学会　全国大会　倉敷大会　基調講演　「住民が絆」	岡山の福祉文化を語る会

(大学講義)

7月5日	広島市立大学	共通科目「NPO論」特別講師　東日本大震災とNGO
7/6-7/27(毎金曜日)	神戸女子大学	国際ボランティア活動論
7月17日	就実大学	学生生活概論(人文科学部・教育学部授業)　ボランティア活動
9/13・9/20・9/27	相生市看護専門学校	災害看護　-
9月15日/18、19日	岡山県立大学大学院	「災害医療援助持論」公開講座(9/15)　集中講義(9/18、19)

(イベント)

7月8日	市民参加型人道支援外交AMDAグループ第5回円卓会議および感謝の集い
7月8日	入江洋文・西牧尚子～東日本大震災被災者支援～チャリティコンサート　AMDA共催
7/25-7/30	AMDA・華蔵寺合同プログラム 東日本大震災被災者夏休み岡山招待プログラム
8/25-9/1	第2回「おかやま国際塾」
9月28日	AMDA野土路農場　稲刈り
9月2日	AMDA鎌倉クラブ　チャリティーコンサートVol.14 津軽三味線　柴田三兄弟　絆

(東日本被災地復興)

7月14日	おおっちママサークルひだまりイベント ヨガで心も体もリフレッシュ II 梅雨を乗り切ろう！ アロマミストづくり
7月15日	大槌北小福幸きらり商店街主催：福幸きらり夏祭り

モンゴルでの活動

日本モンゴル友好病院開院

日本モンゴル国交樹立40周年の本年8月26日、AMDAモンゴル支部のオユンチメグ医師が、Japan Mongolia Friendship Hospital（日本モンゴル友好病院）を開院しました。構想から12年の年月を経て、モンゴル、ウランバートルのダンバダルジィア地区に、内科、眼科、歯科、小児科、婦人科などとともに30床の入院施設を備えた病院です。

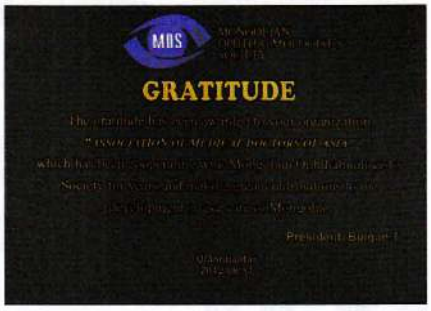
開所式には、地元の関係者、AMSAモンゴル等が参加し、馬頭琴の演奏や歌が花を添えました。オユンチメグ医師は、成功の50%は始める事とこの開院を参加者とともによろこび、今後高齢者が多いこの地域の医療に役に立ちたいと抱負をのべました。

日本から参加したAMDA菅波理事長も、日本モンゴル友好病院の役割は、1、災害拠点病院、2、次世代教育病院、3、日本とモンゴルの友好促進の3つを挙げ、相互扶助の理念を具現化していってほしいと希望と期待を述べました。また、この開院式にあたり、岡山県総社市の高杉こどもクリニックとの姉妹医院協定が結ばれました。（写真は開院式でのテープカット）

モンゴル国眼科医協会より感謝盾が贈られる

モンゴル国における眼科分野貢献に対しモンゴル国眼科医協会より感謝盾が贈られました。

AMDAは、2009年よりモンゴル国眼科協会と協力して、様々な医療支援を行ってきました。2009年は、白内障手術のための事前調査。2010年は、ノモハン事件（ハルハ川戦争）従軍関係者、24名への無償白内障手術、第1回検眼師養成集中セミナー（眼科医120名が参加）、ダンバダルジィア地区の小学校の子どもの眼科検診33名。異常のあった19名の子どもへの眼鏡無償提供。2011年は、第2回検眼師養成集中セミナー（眼科医、眼鏡店主100名参加）学校での眼科検診をメディアを通じて呼びかけ。菅波代表による弱視の子ども健康相談。13人の子どもへ眼鏡無償提供。2012年は、子どもの弱視専門セミナー（眼科医23名）16名の子どもへの眼鏡無償提供。これらの活動が評価され、モンゴル国眼科協会のブルガン会長（Dr. Bulgan Tuvaan）よりAMDAへ感謝盾が贈られました。18歳以下の人口が全人口の1/3を占めるモンゴル国で、若年層の眼科治療に貢献することは、医療分野のみならず、教育分野の支援にもつながります。これからも眼科分野を中心に医療支援を続けます。



贈られた盾

オルソン県バヤンウンドゥル郡の洪水被害に対する生活支援活動

2012年7月13日から14日、ウランバートルから400km離れたオルソン県バヤンウンドゥル郡で89.7mm/Hの強い雨の影響で鉄砲水が発生しました。NEMA（モンゴル国家危機管理庁）の報告によると、7月16日までに2名の死亡者がでており、260世帯（1世帯平均5人）に影響し、うちの約25%にあたる67世帯が全壊または一部損壊し、橋や道路も破壊され、15ヘクタール以上の農地も被害を受けました。家を流されるなどの被害を受けた67世帯に対してAMDAはモンゴル赤十字と協力して9月17日、生活支援活動を行いました。AMDAからは米、小麦粉、砂糖、塩、IFRCからは毛布、ストーブが被災家族に渡されました。家を流された家族は、一時的に家やゲルを借りており、精神的にも大変なストレスを抱えていたことから、支援物資の配布の他に、歌や馬頭琴の演奏も組み込まれたセレモニーを開きました。被災者の方々は、「いくらお礼を言っても足りない」とお礼の歌を披露し、想いを表現される方もいました。その後、父親が病気の家族や、子どもが多く貧しい家庭等、セレモニー会場まで来ることができない家族を訪問し、直接手渡しお見舞いしました。

被災者訪問する山路看護師

<ご案内> 11月3日 公開講座

・・・・・・・・・・支・援・者・紹・介・・・・・・・・・・

バイオリニスト・ピアニストの入江ご夫妻より

フィリピン洪水にむけ街頭募金 岡山倉敷フィリピノサークル&高校生会

川崎医療福祉大学看護科学生 御一同様より

曹源寺様より